

共生型原子力探る

9日から国際会議

福井 敦賀、一般聴講者募る

二十世紀の共生型原子力システムに関する国際会議が九日から三日間、敦賀市の若狭湾エネルギー研究センターで行われる。同日に同センターで開かれる研究者らの講演「二十世紀の共生型原子力を考える」に、一般からの参加者を募集

している。

講演は午後一時から同五時までで同時通訳が付く。内閣府大臣官房審議官の大江田憲治氏が「わが国の科学技術政策」、中国・清華大教授の張作義氏が「ペブルベッドモジュール型高温ガス炉プロジェクト」、ノルウエー・エネルギー技術研究所理事のフリディトフ・オウレ氏が「OE

CDハルデン原子力プロジェクトの人間—技術—組織(MTO)研究」と題して話す。

事前申し込みの必要はなく、当日はJR敦賀駅—同センター間の無料送迎バスが運行する。正午にJR敦賀駅を出発し、講演終了後に同駅まで戻る。問い合わせは同センター ☎0770(24)7274。

原子力との共生探る

19.7.10 福井(24)

敦賀 国際会議に120人参加

二十世紀の共生型原子力システムに関する国際会議が九日、敦賀市の若狭湾エネルギー研究センターで始まった。十一日まで国内外の研究者らが、安全で効率的なシス

テムの構築に向け、講演や分科会で情報交換する。科学技術と人間社会の共生を深めようと、共生社会にかかわる活動を展開しているNPO法人「シンビオ社会研究会」

や、日本原子力学会HMS部会などが初めて開催。日本をはじめ中国や韓国、米国、欧州などの八カ国から百二十人が参加した。

開会式で大会長の吉川榮和・同研究会長が「地球温暖化などで原発の役割が再認識されているが、地域社会との共生は大きな課題。この会議で高度な原子力技術を展望してほしい」とあいさつ。大江田憲治・内閣府大臣官房審議官ら三人が講演した。

七、十一の両日は分科会が開かれ、運転員の支援システムや訓練、シミュレーション技術、計測制御システムなど五十件以上の論文を発表。さらに期間中、原子力を学ぶ日中韓の大学生ら二十人が、共同学習して交流を深めるサマースクールも行われる。

本社来訪 (9日)

▽敦賀支社 紅谷一利氏 (北陸銀行支店部長) 〓 担任あいさつ
小倉章史氏 (北陸銀行敦賀支店長) 〓 新任あいさつ

拠点化計画から 原子力共生へ国際会議

◆東アジア参加者多く、日間にわたり開催され、人間、社会、環境への親和性の高い原子力システムの実現に向けた国際シンポジウム「21世紀の共生型原子力システムに関する国際会議（ISSNP）」が、福井県敦賀市の若狭湾エネルギー研究センターで11日まで3

日間開催され、原子力システムの展望について最新の研究成果を交換した。9日には、国内外の研究者3人による講演会を開催し、原子力システムの深刻化にともない、あらゆる活動に共生という概念が求められている。原子力発電は共生を実現したサステイナブルな社会への切り札的手段と述べた。

となる」と述べた。

講演会では、中国の張作義・清華大学教授が「ペブルベッドモジュール型高温ガス炉プロジェクトとその技術的検討」と題して講演。その他、日本から大江田憲治・内閣府大臣官房審議官、ノルウェーからフリデイトフ・オウレ・エネルギー技術研究所理事もそれぞれ講演を行った。

シンポジウムでは、3日間の期間中、最新の計測制御技術やシステムシミュレーション技術、ヒューマンインターフェース技術などに関する52件の論文発表が行われた。また東アジア地域の若手研究者・技術者の人的ネットワークづくりを目的とした「日韓サマースクール」も合わせて開催され、日中韓の若手研究者21人が参加し、交流を深めた。